Ⅸ　招聘講演・研究発表

本章では、平成 22 年４月～平成 26 年３月の間におこなわれた本学の日本語リテラシー教育に関する外部依頼講演や、公表された研究成果について紹介する。

1. 招聘講演　（外山敦子）
2. 研究発表
　2-1）論文
　2-2）研究発表

1．招聘講演

講演会名称	平成 24 年度 愛知淑徳大学文学部授業改善・情報交流会
日　時	平成 24 年 11 月 27 日（火）9:30～11:00
会　場	愛知淑徳大学長久手キャンパス研究棟２階 K1 会議室
演　題	全学共通履修科目「日本語表現 T1・T2」の学修成果と課題
発表者	全学日本語教育部門准教授　外山敦子
参加人数	20 人
概　要	平成 24 年度新入生学習力調査（国語）の結果を学科別に分析した結果をふまえ、本年度の「日本語表現 T1・T2」でおこなっている取り組みの概要と成果、および文学部学生の日本語運用力に関する課題について報告する。

講演会名称	平成 24 年度第２回 龍谷大学文学部 FD 研究会 平成 24 年度第１回 龍谷大学大学院文学研究科 FD 研究会 平成 24 年度第１回 龍谷大学大学院実践真宗学研究科 FD 研究会
日　時	平成 25 年１月 16 日（水）16:45～18:15
会　場	龍谷大学大宮学舎清風館 B1 階 B101 教室
演　題	学生の多様化に応じた教育体制の構築―愛知淑徳大学「日本語表現」科目を例として―
発表者	全学日本語教育部門准教授　外山敦子
参加人数	50 人
概　要	本学全学共通履修科目「日本語表現」（１年全学必修）における取り組みの現状と課題を報告しながら、多様な学生に主体的な学修を促す教育のあり方について、具体的な方法を紹介しながら考える。

講演会名称	平成 24 年度第３回 皇學館大学 FD 講演会
日　時	平成 25 年２月 26 日（火）13:30～15:00
会　場	皇學館大学記念講堂大会議室
演　題	愛知淑徳大学「日本語表現」科目における実践とその効果 ―大学での〈学修〉に必要な日本語運用能力向上のために―
発表者	全学日本語教育部門准教授　外山敦子
参加人数	50 人
概　要	大学進学率の上昇にともなって大学生の学力や学修意欲が多様化し、近年では大学の授業に即応できないケースもみられるようになった。本発表では、愛知淑徳大学全学共通科目「日本語表現」における実践と学修効果および課題の報告を通して、大学生に必要な日本語運用力とは何か、その力をいかにして養成すべきかについて考える。

2．研究発表

2-1）論文

著者名	論文の名称	掲載書誌名	巻号	発行年月
外山敦子	愛知淑徳大学における日本語リテラシー教育の展開	愛知淑徳大学論集 ―文学部・文学研究科篇―	36	H23.03
入口　愛	学修成果の記述による教育的効果―全学必修科目「日本語表現 T1」の実践報告―	愛知淑徳大学国語国文	36	H25.03
森本俊之	「彼は彼女が好きだ」のあいまい性―あいまい性をもたらす文法論的および意味論的素因について―	愛知淑徳大学論集 ―交流文化学部篇―	3	H25.03
外山敦子	ピア・レスポンスの効果を高めるグループ編成 ―小論文のグループ添削における実践を通して―	愛知淑徳大学論集 ―文学部・文学研究科篇―	39	H26.03

2-2）研究発表

発表者	研究発表の名称	発表学会等の名称（会場）	発表年月
外山敦子	協働的アプローチによる言語技術力の育成 ―大学初年次教育における実践―	名古屋・協同の学びをつくる研究会 （名古屋大学）	H22.04
外山敦子	平成 24 年度全学必修科目「日本語表現 T1」実施報告	平成 24 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H24.08
入口　愛	学修成果の記述による教育的効果	平成 24 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H24.08
森本俊之	小論文作成における協同学修の試み ―互恵的なテーマ理解のために―	平成 24 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H24.08
櫛井亜依	「日本語表現」科目の現状と課題 ―受講アンケートの分析を通して―	平成 24 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H24.08
外山敦子	平成 25 年度「日本語表現 T1・T2」実施報告	平成 25 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H25.09
深津周太	話しことばの修正における‘語レベルの言い換え’への依存―オノマトペ由来の連用修飾表現「しっかりと」の使用から―	平成 25 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H25.09
森本俊之	小論文における論証の評価方法について―語用論的見地から―	平成 25 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H25.09
外山敦子	ピア活動の効果を高めるグループ編成 ―小論文のグループ添削における実践を通して―	平成 25 年度全学日本語教育部門 授業実践報告会（愛知淑徳大学）	H25.09

《コラム④》 日本語教育と学部専門教育の連携を深める――学生の日本語能力向上へ向けて

ビジネス学部教授　　大 塚　英 揮

「私が一番の自信を持っているのはコミュ力です！」と堂々と言ってのける学生は多い。筆者自身は、コミュ力（コミュニケーション力）に全く自信の持てない人間なので、学生の自信満々な様子を正直うらやましく思っている。しかし、その一方で、学部専門教育の授業で毎回提出させるミニレポートにおける日本語の出来は「……」なことが多い。大人同士のパブリックなコミュニケーションにおいても通用するような能力には乏しいが、「コミュ力」には自信がある。このギャップはどこから来ているのだろうか。

この場合のコミュニケーションとは、おそらく自分の属するとても狭い「親密圏」の中だけで通用する「コミュニケーション」、すなわち年代の近い「仲間うち」においてのみ通用するコミュニケーションなのだろう。友人と普通に仲良くやってるし、バイト先でもすぐなじめて、お客さんにも笑顔で挨拶できる。どうだい、俺ってコミュニケーションとれてるだろ？そんなかんじである。

コミュ力に自信のある学生に、日本語学習の必要性を強く「自分ゴト」として認識させるのはとても難しい問題である。しかし、日本語学習を「他人ゴト」としてとらえているうちは能力の向上は期待できない。「やらされている」「やらなければならない」から、「やりたい」への転換、すなわち受動的な学習から能動的な学習への転換が日本語教育の効果を高める上でどうしても求められるのである。

本学の全学日本語教育部門における教育内容は、他大学と比べても充実度が高い。能動的に学習する仕組みも充分整えられており、実際に学生の日本語能力の向上という点で目に見える成果も残している。問題は、日本語教育部門で展開された教育の成果が、その後の学部専門教育で十二分に活用されていない点にある。

専門教育を展開する学部所属の教員のうち、日本語教育部門で展開されている教育内容をきちんと把握している者はとても少ないように思われる。恥ずかしながら筆者も、全学日本語教育部門の委員となってはじめて知ることとなった次第である。Cinii をつかった文献検索を教えていること、社会問題をテーマに肯定的意見と否定的意見をグループワークでたたかわせながらレポートを作成する試みが行われていること……能動的な学習につながる意欲的な試みが本学日本語教育部門で多数展開されていることに驚きの念を抱いたというのが正直な感想である。

しかしこれらの優れた「能動的学習の仕組み」も、全学で行われる授業の中で一度体験しただけでは身につくことはない。その後学生が受講することになる学部専門教育の中でも、日本語教育部門で学んだことを反復的に活用できる機会を設けることが必要なのである。

学部専門教育の授業でも、レポートを書くときは必ず参考文献を検索、引用することを求め、参考文献リストをつけるときは、日本語表現の授業で学んだ表記法で表記することを求める。レポートの構成を教える際も、日本語教育で学んだものをベースとしながら、その上に分野特有の作法をのっけていく形で展開する。僕ら学部所属の教員が、全学日本語教育の中身を理解し、それを１つの「スタンダード」としながら、日々の授業、ゼミを展開していく。そうしてはじめて、日本語教育部門で展開した学びの成果が、大学生の日本語能力の実質的な向上という形で花開くのではないかと思われる。

「全学日本語教育部門と学部専門教育との連携」を深めていく。学部所属教員である筆者もこの点を肝に銘じて、専門教育に取り組んでいきたい。